

ジョン・レーとソースタイン・ヴェブレン

— 衒示的消費を中心として —

John Rae and Thorsten Veblen on Conspicuous Consumption

内 田 成

UCHIDA, Minoru

I. はじめに

ソースタイン・ヴェブレン (Thorstein Veblen, 1857-1929)⁽¹⁾ の『有閑階級の理論—諸制度の進化に関する経済的研究—』⁽²⁾ は1899年に出版されたが、その名を不朽ならしめた処女作である。この書物は有閑階級の発生、成長の過程ならびに、その習慣や生活様式を述べたものであるが、特に消費を制度 (institution)⁽³⁾ として捉えている点に特長がある。いうまでもなく、これまでのわが国におけるヴェブレンならびに制度派経済学研究においても、この著作は研究されてきているが、ジョン・レー (John Rae, 1796-1872) との関連については全く究明されていない。⁽⁴⁾ ヴェブレンは「衒示的消費」(conspicuous consumption) という概念を中心に富裕な諸個人の消費行動を分析したが、それは「名声」や「地位」財への重要な研究体系を生み出した、といえる。⁽⁵⁾

そこで私はヴェブレンとジョン・レーとの関連をエージェルとティルマンの論文「衒示的消費に関するジョン・レーとソースタイン・ヴェブレン：等閑視された知的関連」⁽⁶⁾ を採り上げ、特に衒示的消費を中心に見て行くこ

とにした。

II. ジョン・レーとヴェブレン

レーは1796年にスコットランドのアバディーンに生まれた。1815年にアバディーン大学を卒業後はエディンバラ大学に進学したが、家業の倒産のため1817年には医学の勉強を断念せざるを得なかった。その後1823年にカナダに移住、さらに合衆国に移った。ボストン、ニューヨーク、カリフォルニアに住み、ハワイにも移住したが1872年にニューヨークで亡くなった。⁽⁷⁾ レーは19世紀の経済学史においてはあまり注目されない地位にあるといえるが、ミル (John Stuart Mill)、フィッシャー (Irving Fisher)、シュンペーター (Joseph Schumpeter) およびヴェブレンなど多くの社会学者に重大な影響を与えてきたといわれている。⁽⁸⁾

ところでヴェブレンとレーの間の知的関連であるが、エージェルとティルマンによれば、ヴェブレンがレーの業績を確かに知っていたことを示す二つの証拠がある、という。一つはフィッシュの「利子率」に関する論文の中でレーに言及している。⁽¹⁰⁾ もう一つはヴェブレンがレーの名前に言及した唯一の時であ

キーワード：消費、ヴェブレン、ジョン・レー、衒示的消費、制度
Key words : consumption, Veblen, John Rae, Conspicuous Consumption, Institution

る。⁽¹¹⁾

このようにヴェブレンはレーの業績を認めているといえるが、特に引用してはいない。それは彼が「多少とも読書に親しんでいるものなら、直ちにその出所を辿ることができるにちがいない」という理由からである。⁽¹²⁾ エジェルとティルマンの見たところ、レーがヴェブレンの衒示的消費理論に影響を与えた、という点に関して多くの研究者が主張してきた。例えば、早くも1936年にペインは『『有閑階級の理論』においてヴェブレンはレーの概略的な章に付加し、天才の兆候を示す古典的な論文の中で展開した』と主張した。⁽¹³⁾ ライベンシュタインは「1950年に衒示的消費の社会学的な研究はヴェブレンによって有名になった。けれどもヴェブレンは衒示的消費理論の発見者でもないし、詳細に述べた最初の人間でもない。1834年以前に書いていたジョン・レーは衒示的消費について全く広範囲にわたる取り扱いをしている」と言及している。⁽¹⁴⁾

この点は複数の人々によって繰り返し主張されている。たとえば、「ヴェブレンはレーによって示唆された」(Spengler)、「レーによって影響を受けた」あるいは「レーと同様な知的伝統の一部によって影響を受けた」(MacRae) などである。⁽¹⁵⁾

レーの衒示的消費についての分析に関する検討とヴェブレンのこの「例外的な消費者行動」理論についてはメイソンによって行なわれている。⁽¹⁶⁾ エジェルとティルマンはメイソンの所説を次のように要約している。それによれば「メイソンはレーと同様に衒示的消費の概念をローマ人にまで遡り跡づけているだけでなく、アダム・スミスも社会経済的行動のこの形態を討議している、と述べている。また彼は、衒示的消費に対するレーとヴェブ

レンのアプローチが似ていない、と示唆している。すなわち、レーは彼の時代の支出の過剰や贅沢に反する一つの極めて単純な動機、つまり虚栄心が存在することを討議している、他方ヴェブレンは衒示的消費への『動機』が個人の所有権や富の卓越差を見せびらかすために与えられている社会的重要性からのみ引き出しうる。つまり社会的地位や名声によって与えられている。虚栄心と社会的地位との間のこの区別に基づいてメイソンは、ヴェブレンの衒示的消費の説明がスミスのものとは両立しうるが、レーのものとは両立し得ない、と結論づけている」。⁽¹⁷⁾ 要するに「レーは衒示的消費に対するいかなる正当なあるいは理解しうる社会的必要も認めなかった。そしてそのような行動は純粋に勝手気儘さによって引き起こされている、という主張は1750年以前の衒示的な誇示についての見解と一層共通する」というのがメイソン結論である。⁽¹⁸⁾

この簡潔な考察を別とすれば、メイソンはその著作の長い研究のどこにおいてもレーとヴェブレンの知的関連を詳細には論じてはいない。換言すれば、彼は彼らの社会的思想におけるその他の考えられうる類似点を考察していないし、ヴェブレンへのレーの影響の本質あるいは程度という問題も提起していない。彼は単に彼らが衒示的消費という問題に対していくらか異なった貢献をした、と述べているに過ぎないし、ヴェブレンの衒示的消費が主要なものである、と主張しているに過ぎない。⁽¹⁹⁾

このように今日まで衒示的消費に対するレーとヴェブレンの間の連続性および非連続性は未だに体系的には評価されていない。しかし、レーが「消費は衒示的ではない」や「消費は衒示的である」というフレーズを初めて

使ったことを知られているし、ヴェブレンが「衞示的消費」という用語を作ったことも知られている。⁽²⁰⁾

Ⅲ. ジョン・レーと衞示的消費の概念

衞示的消費の概念についてのレーの分析は『政治経済学の主題に関する若干の新原理についての声明』⁽²¹⁾の11章に主に見出される。この研究の主要な目的はアダム・スミスの批判に基づき資本蓄積論を展開することであった。手短かにいえば、レーはスミスが私利の追求を強調したが発明の役割を無視した、と主張した。⁽²²⁾したがってレーは国富が増進させるために国内外の技術的進歩を促進する国家政策を支持した。しかしながら彼は「その傾向が一般的蓄積の進歩を停滞させるか、あるいは実際にすでに存在している総額を減少させるという反対の原理が存在する」⁽²³⁾ことも知っていた。

これらの反対の原則の一つは虚栄心である。つまり「その卓越性という長所へのいかなる言及なしに他人よりも優位に立ちたいという単なる欲望である」。レーは「虚栄が最もすぐに適応されるものは、その使用あるいは消費がもっとも明白であり、その結果が差別化するのに最も困難なものである。消費が衞示的でない物品は、この感情を満足させられない」。⁽²⁴⁾

当該商品が稀少で、高価で、見せびらかされる場合、「消費は衞示的である」と彼は続けて述べている。彼は「食卓の贅沢さ」が衞示的消費の一般原則を例示しているし趣味を判断するさいの文化的多様性も説明する、ということを示唆している。食物および飲料の衞示的消費に加えて、レーはまた、商品の差別化に言及してドレスやファッションも論じて

いる。「生産技術や産業の生産力の改善によって、何らかの一枚のドレスの支出が非常に適度な場合、多様性は当然非常に大きい。富者は何らかの一枚のドレスの支出によっては自らを差別化することができないから、当然ドレスの多さや多様性によって差別化しようとする」。⁽²⁵⁾

レーは贅沢品への欲望を刺激する「利己的虚栄心」を有用性への需要を活性化する「社会的また慈善的な愛情や知的な力」と対比するが、「しかしながら、虚栄心同様有用性がかなりの程度で共有されない商品はほとんど存在しない」と警告する。⁽²⁶⁾彼はこの点を衣服、食物、飲料、家具や家などの「真の欲求」を充足させる多くの基礎的商品への言及によって論じている。それらの「差別的な」要素は「有用な品質」と共存している。⁽²⁷⁾たとえば、シルクの衣類、海から遠く離れた場所でのみ消費される魚、象牙の椅子、金のプレートのあるベッドや「居心地よりも目立たせることにより配慮して建てられた家屋」⁽²⁸⁾などである。彼の見解では、それは純粋な贅沢あるいは純粋な有用性であるはずのいかなる商品にとっても非常に例外的である。

かくして、レーにとって、事実上あるゆる商品に固有の二つの相反する特徴「あるいは原理」が存在する。つまり、一つはある人の社会的優越感を証明するものであり、もう一つはある人の「真の欲求」を充足するものである。レーは、二つの原理の間には一種の衝突がある、と注釈を加えている。⁽²⁹⁾相反する要素の解消は「当該の物品の中に存在しているそれぞれの品質の種類に依存し、その程度によってその消費が明白になる」。⁽³⁰⁾それゆえに、彼は、ある商品の機能が時を経て変化しうること示唆している。石鹸、シルク、

コットンやガラスはある時は贅沢品と考えられていたが、より広く消費されるようになるにつれて、どのような理由であろうとも贅沢品と見做されなくなった。というのも、それらの消費がもはや衞示的な階級の特徴ではなくなったからである。⁽³¹⁾

その分析を通じてレーは、衞示的消費の文化的な性格を強調している。例えば、彼は社会的な水準において、虚栄心や贅沢の強さや普及は都会の社会において一層大きい、と述べている。⁽³²⁾彼はこの状況を田舎の地域や「勤勉および儉約」を促進する新しい地域における状況と対比している。つまり、「人々が非常に散在している状況では、効果的に虚栄心を抑えられる。一定の範囲内で物品を入念に作り上げる絶対的な必然性は、蓄積原理を働くように刺激し、これらの物質の豊富さは、絶え間なく努力をするように刺激する。それゆえに、放蕩なヨーロッパ人にとって、辺境ほど優れた学校は存在しない。辺境の地や開拓地に何十年も住んだ後では、彼は完全に変わった人間になっている」。⁽³³⁾

エジェルとティルマンによれば、レーは人間行動が社会的に構成される、ということ十分に認識していた。虚栄心、すなわち他人より優っていると思われたいという願望は社会のすべての構成員に影響を与える。「この欲望によって引き起こされる支出は、あらゆる階級におよぶ」。⁽³⁴⁾ 事実、ある人が社会階層を下降するにつれて「必需品あるいは生活の便宜品のいずれでないものに支出される総額は減少するが、それ以外の支出はより明らかに贅沢なだけである」。⁽³⁵⁾ さらに社会階層のより下層に下降した人々は、「名誉ある社会に対する世襲の富や世襲の権利を持っている金持ち」⁽³⁶⁾の人々を模倣する傾向がある。に

もかかわらず、「個人にいかなる責任も付随しない。虚栄心という感情が促進する愚行に従っているためだからである。どんなひとにとっても一般的な見解や慣行に抵抗するのは空しいし、馬鹿げたことである。もしも彼がそうするのならば、彼はその社会が与える慣習よりも非常に大きな災いにきつと遭遇する」。⁽³⁷⁾

かくしてレーの見解では、衞示的消費はある一定の社会的状況によって促進され、その他のものによって妨げられる。彼の説明の主要な目的は「相互の優越を得るための人々の間の普遍的な傾向」という文化的なできごとではなくて、資本蓄積や政府の政策に対するかかる行動のもつ経済的な含意にある。

レーの著作は経済成長、最も重要なものは「社会的ならびに慈悲深い愛情と知的力」の勢力と範囲に依存している「蓄積」原理および発明原理を支持する社会的要因に関連している。『著作のより後の部分においてのみ、彼は上で言及した反対の傾向を詳細に考察している。その最も顕著なものは「虚栄心」原理の作用である。それは「一般株の進歩」を停滞させるか、あるいは「すでに存在している総額」を減少させる。「慈悲深い社会的愛情の流行および知的な力の強さは、そこから社会の富と繁栄の増大が生ずる偉大な源泉である。その富の減少は反対の原理の普及によって、純粋に利己的なものの優勢さおよび本性の知的で道徳的な部分の低下によって主に生ずる」。⁽³⁸⁾

かくして虚栄心と効用の対比の主要な目的は、経済成長という観点では、それらはあらゆる既知の社会に存在する矛盾する原理であることを示すことである。さらに彼は明確に経済発展を損なう生産および衞示的消費を次

のように把握していた。⁽³⁹⁾レーは次のように述べている。

「あらゆる贅沢品はその総額に比例してその社会にとって損失を生ぜしめる。情報を利用する産業は将来の欲求に対していかなる供給も産み出さないし、無駄に費やされると言われるかもしれない。社会を一つの体系と見做した場合、社会はいかなる欲求も供給しない。社会はいかなる絶対的な享樂も与えない。それはすべて相対的である。あるものが上昇するだけ、他のものは下落する。あるものの持っている卓越は、他の人の劣等にちょうど等しくなる。それゆえに、贅沢品の生産の促進は絶対資本のいかなる追加ももたらさない。」⁽⁴⁰⁾

レーは衛示的消費によって引き起こされる経済的資源の浪費を「無駄遣い」として言及し、結果として生じる損失の程度は、いかなる所与の社会においても相反する社会的諸力のバランスによって決定される、と示唆している。換言すれば、経済的繁栄は社会のパターンに依存している。それは知的な力ならびに慈善的な愛の強さと虚栄心を促進する利己的感情の間の正反対の関係から生ずる。虚栄心は経済成長を「直接的に」停滞させるのと同様に「間接的に」反対の効果を達成するために作用しうる。これは贅沢品に属する「効用という事実」のためである。それらの需要は技術的進歩を促進し、より大きくより安い規模での生産を促進しうる。⁽⁴¹⁾

彼が階層化の拡散が生じた物品の社会的機能における変化を論じるのはこの文脈においてである。そして石鹼、シルク、コットン、ガラス製品などのさまざまな歴史的事例を挙げている。商品の持っている本質的に矛盾する性格は、贅沢品から引き出される美および快樂

についてのレーのコメントにも反映されている。彼はこう述べている。美しい物品は「目を楽しませ、こころを和ませるかもしれないが、その消費は見せびらかしの要素を含んでいる。かくして贅沢品が関連している限りにおいては大部分の場合において、真の楽しさは大部分単なる虚栄心と交じり合っている」。彼は、美は効用のように虚栄心の程度に反比例して変化することも示唆している。⁽⁴²⁾そこで彼は絹の例を挙げている。

「まず、第一に絹は全くの贅沢品である。衣類として絹は、いかなるその他の織物よりもはるかに美しい。しかし、それが金と目方で交換された場合には、その美しさは、それを身に纏うことから得られる喜びの小さな一部分を与えるに過ぎない。今や贅沢品ではほとんどない織物もある。つまり、耐久性や美しさという特質は、そのものに真の優越を与え、それに対して支払われる優越価格がいかなる浪費でもないようにさせるのに十分であるように思われる」⁽⁴³⁾

にもかかわらず、最終的には贅沢品の生産および消費の「間接的」な経済的優越性は、「直接的な」浪費効果によって補って余りある「非本質的効果」である。かくして、実用品あるいは贅沢品において効果的に作用するような発明的な能力の活動から生ずる異なった結果があるものをその他のものから区別する手段を与える。発明の進歩は実用品の消費を拡張する。それは純粋な贅沢品の消費を減少させる。事実レーは、どの程度まで物品が虚栄心を満足させるか、あるいは真の欲求を充足させるかに依存して位置づけられうる、かに関して一つの連続性を仮定している。

その実用性に基づく消費と衛示的消費との間の区別および経済成長へのそれらの影響と

平行して、レーは二つの異なった国家政策を提示している。彼は実用品の場合には自由貿易を支持するが、贅沢品の場合にはそうではない。彼はセー（Jean Baptiste Say, 1767-1832）を引用し、実用品のための自由競争は、かかる財の消費の増大を導き、かくして「真の欲求」の充足を増大させる、と主張する。⁽⁴⁴⁾ 彼は反対のことが贅沢品の場合に当てはまると主張する。それゆえに自由競争は、この場合には望ましくない。この文脈においてレーは「立法者はまず、第一に海外の芸術を自国への移転において。第二にさもなければ贅沢品に浪費される基金の有効な目的への適応において社会にとって有利なように動くかもしれない」と述べ国家の役割についてのその考え方を修正している。有効な物品の生産のために新しいテクノロジーの導入を促進するために彼は「外国貿易のうまくいった模倣品への補助金、自国の製造業への補助金、あるいは海外から輸入品への課税など」を含む短期の保護的関税制度を推奨した。贅沢品に関して彼は、課税の漸次的増加を規定した。それによって「立法者に収入を与え、社会から何物をも取らない」。換言すれば、贅沢品への課税は国家の収入を増加させ、かかる財は虚栄心を満足させ続け、社会的な地位を示しうる、というのがレーの所説に関するエジェルとティルマンと要約の結論である。⁽⁴⁵⁾

IV. ソースタイン・ヴェブレンと衞示的消費の観念

次にエジェルとティルマンは、こう述べている。衞示的消費に関するヴェブレンの最も初期の論考は「婦人のドレスの経済理論」⁽⁴⁶⁾ という論文においてであった。その論文において彼は、人間の衣服は二つの主要な理由に

よって着られている、と主張した。つまり「衣服」すなわち「物的な満足感」と「ドレス」すなわち「立派な外観」である。彼のテーゼは、人間の衣服は双方の目的のためであるけれども、ドレスは人間、特に女性にとって「財貨の衞示的消費」のために非常に重要である。

人間の衣服は一般的に「社会的地位」を示しやすい。というのも、ドレスが衞示的贅沢、衞示的浪費および有用な努力からの衞示的欠如を示すために使用されるからである。ヴェブレンは、これらの要素を3つの「婦人のドレスの理論の基本的な原則」として言及している。それとともに、それらは「婦人のドレスの本質的な基準を構成し、富という点での人々の間の競争の機会が残っている限り、いかなる必要性も永久にそれらを無効にできない」⁽⁴⁷⁾ また、彼は衞示的浪費の原理が人々に「時代遅れである何物をも」着せないように促進する。つまり先端を行く流行のものを着ることを促進する、とも述べている。

かくしてヴェブレンにとってドレスを着ることの主要な目的は「金銭的な力」を示すことである。それは家長制社会における婦人の場合には典型的に彼女たちの「所有者」の富を意味する。それゆえに「婦人の地位は衞示的に非生産的な支出の手段を持っている地位となる」⁽⁴⁸⁾ この論文の最後において、彼が婦人のドレスについての理論が子供のドレスについても適用されることを示唆した時にヴェブレンは「衞示的消費」という用語を始めて使っている。⁽⁴⁹⁾

ヴェブレンの衞示的消費の観念についてももっとも展開された説明は『有閑階級の理論』に見ることができる。この著作において、製作（workmanship）と略奪の間の彼の基本的な区別、それらの異なった進化論的変化の段

階での文化的な重要性および最も適切な商品の消費に対するそれらの関連が有閑階級の起源、本質および永続性に関連するその理論の文脈において、すべて展開されている。

より具体的にヴェブレンは、商品が機能的あるいは実用的な役割と見栄的あるいは地位を強化する役割の両方を演じうる、と主張している。

「ある商品は有用でもあり、また浪費的であるかもしれない。そして、その消費者に対する効用は非常にさまざまな割合で、有用さと浪費から成り立っているかもしれない。……ある種の品物あるいはサービスの主要な目的や要素が、いかに明白に衒示的浪費であるにしても、それらのものの用途には、有用な目的が少しもないと主張することは危険であろう。また、主として有用な生産物について、その価値のなかには、浪費の要素は直接的にも間接的にも全く無関係である、と主張することは、いくぶん危険の程度が少ないだけであろう」。⁽⁵⁰⁾

ヴェブレンは「浪費」を「人間の生活あるいは人間の福祉全体」⁽⁵¹⁾に役立つ支出に言及するために使っている。彼は続けて「初めは浪費的であった支出が消費者の理解において生活の必需品」となりうる、と述べている。例えば「絨毯や敷物、銀の食卓器具、給仕人のサービス、シルク・ハット、糊のきいたシャツ、たくさんの宝石やドレス」などである。⁽⁵¹⁾ しかしながら、重大な問題点は「それが非個人的に考えられた生活過程を促進するかどうかである。というのも、これこそが製作本能 (instinct of workmanship) の判定の基準であり、そして、その本能こそが、経済的真理ないしは妥当性のあらゆる問題の最高裁判所であるからである」⁽⁵²⁾。二つのタイ

プの消費の間の関連は「相反するもの」である。「製作本能は、それが衒示的浪費の法則と衝突するかぎり、実質的な効果を強調する気持よりも、むしろ、明らかに無駄ものは、厭わしいものであり、美しいはずがないという不変の気持となってあらわれる」。⁽⁵³⁾

ヴェブレンは特殊化した消費が「富の証拠」を与えるために「生活にとって必要な最小限度を」および「物的効率を超えた」消費を発展させることができる、と述べている。したがって、「しかるべき質と量の消費することができないことは劣等および無力の刻印となる」。⁽⁵⁴⁾ これは特に食物、飲料、麻薬、避難所および祭礼に当てはまる。

エージェルとティルマンによれば、ヴェブレンは財貨およびサービスの衒示的消費が最も初期の略奪的時代の有閑階級の間に始まったけれども、近代の社会においては、あらゆるその他の階級はその規範的な力によってこの支配的な価値観を従うように、また自分自身を次の上位の階層との関連において判断するように拘束されている、と考えた。⁽⁵⁵⁾ つまり「それぞれの階級は消費のあらゆる基準が最高の社会的金銭的階級、つまり富裕階級、の慣習や思考習慣に対する感知できない等級づけに遡るまで社会階級における次の上位を妬み見栄を張る」。⁽⁵⁶⁾

この歴史的に関連のある階級パターンに加えて、衒示的消費は「農村の住民の所得よりも都市の住民の所得の割合に大きな部分を必要とする」⁽⁵⁷⁾ これは人口の移動が大きな社会では「人々が財貨の誇示以外に名声を判断するいかなる手段もない」⁽⁵⁸⁾ からである。衒示的消費を媒介する「金銭的名声のための努力」が絶えずおこなわれるばかりでなく、あらゆる階級、特に有閑階級にとって文化的な見地

から、それは「至上命令である」。というのも、「見苦しくない生活の標準が、どの階級にとってもますます高くなり、身分を失わないためには、このような見苦しくない体面の要求をまもらなければならない」⁽⁵⁹⁾からである。「主人が体面のために価値のある財を消費できない」比較的低い階層の家庭においてさえ「財の衒示的消費は妻や子供によって続けられる」⁽⁶⁰⁾。したがって「社会のいかなる階級でも、もっとも目も当てられないほどの貧困なものでも、習慣となっている衒示的消費をことごとくやめてしまうことはない」⁽⁶¹⁾。彼はまた「代行的閑暇もしくはサービスの衒示的消費の必要が召使を抱える有力な誘因である」⁽⁶²⁾ことを示唆している。

事実、代行的閑暇および代行的消費は、略奪的文化および衒示的消費についてヴェブレンの比較的大きな議論を貫く顕著なテーマを形成している。彼はしばしば二つの用語を交互に使用する。それは彼がそれらを理論および実践において固く結びつき関連しているものとして、また金銭的な力の明示として見做していることを示している。

ヴェブレンは結局、概して有閑階級文化および特に衒示的消費の社会的ならびに経済的な帰結が浸透し、本質的に有害である、と考えた。その浪費性に加えて、有閑階級文化の保守主義は「社会構造の革新と成長を阻害させるように作用する」。衒示的消費についての彼の本質的に否定的な説明の一つの小さな例外は、比較的下層の階級にとって「見栄が勤勉と節約に対する誘因」として作用するが「上級の金銭的階級」の場合には全くでないにしてもほとんどない、という所見である。⁽⁶³⁾

ヴェブレンの見解は、略奪社会においては「衒示的消費の基準」が「基本的な欲求」の

充足を導き、結局、その指導基準によってすべてのものが「汚染される」が、製作本能という「異質の要因」によってごくわずかにだけ「相殺される」、ということであった。これは異なった種類の労働や知識、男性と女性の役割、趣味の判断、ある人の美の感覚やもちろん、財やサービスの生産や消費の社会的な地位を含むであろう。事実、彼は「近代の文明社会において」初期の略奪状態に起源をもつ見栄的な衒示的消費が社会全体を形作る、と結論づけている。⁽⁶⁴⁾

V. 衒示的消費についてレーとヴェブレン：連続性と非連続性

エージェルとティルマンは以上のようにレーとヴェブレンそれぞれの所説を『政治経済学の主題に関する若干の新原理についての声明』と『有閑階級の理論』を中心に衒示的消費の観念を要約検討してきた。次に彼らは衒示的消費に関してレーとヴェブレンにおける連続性と非連続性の検討に着手する。彼らによれば、その評価のためには、この概念についての思想を彼らが提示したより広い理論的な文脈に注意を向けることが必要である、という。⁽⁶⁵⁾ 衒示的消費の概念についての個々の分析の出発点は経済進歩の非経済的側面に関する関心の共有である。彼らは物品の社会的次元と経済的次元の間を区別し、個人が社会的文脈において活動することを強調する。レーは「人間は社会的な状態以外では存在すらない」⁽⁶⁶⁾と書いている。ヴェブレンは「人間は社会的生き物である」⁽⁶⁷⁾と書いている。

この共有された出発点からレーとヴェブレンは、さらに類似した二重の人間性の概念を唱える。これはレーが「原理」と呼び、ヴェブレンが「本能」と呼んだものと彼ら双方が

「性向」としてしばしば言及したものの間の区別を含んでいる。レーは経済成長に寄与する「社会的慈善的な愛情および知的な力」と「単なる利己的満足の欲望であるその反対の原理」を区別する。ヴェブレンは「経済的に効果的な活動を推奨し経済的無用さを非難する」「製作本能」と「私利」によって促進される「スポーツマンシップ」あるいは「略奪」というアンチテーゼを区別する。しかしヴェブレンは、進化論的变化の理論の中に位置づけることによってレーよりも比較的広い歴史的枠組みの中に、その「性向」のタイプを位置づけている。

また彼らは、「真の」あるいは「根本的な欲求」を充足させる有用な商品と「社会階層」あるいは「価値」を明示する贅沢品あるいは不必要な商品との間に根本的に類似点のある区別を採り入れている。彼らは双方とも後者のタイプの消費を衒示的消費と見ている。しかし、また彼らは双方とも商品は典型的に両方の機能を併せ持っており、相対的な強調が変化を被ることも認識していた。

さらに、彼らは社会の階級および人口統計学的構造から衒示的消費の文化的発生を同様に分析している。彼らは二人とも、比較的下層の階級はより上層の階級の衒示的消費を模倣しがちであり、一般的にそれは田舎よりも都会において支配的であり、また因襲的な消費水準に反対することはどんな人にとっても難しいと述べている。衒示的消費の実例の選択一特に食品、飲料、祭礼、ドレスおよびファッションは同様に類似している。また双方とも商品の消費において含まれる趣味や美の判断がしばしば関連した稀少性、コストおよび社会的地位などによって影響を受けることも理解していた。

レーは贅沢品への需要が、それらをより安価に生産するための発明を刺激しうるし、それによってすべての人にそれらが役立つようになる、と主張した。他方ヴェブレンは、労働者階級の間での勤勉と節約は見栄のプロセスによって促進されるかもしれない、と述べた。

衒示的消費に関する彼らの見解において重要な比較のポイントはレーの焦点がその経済分析の政策的含意にあったが、ヴェブレンは社会的含意を強調したことである。レーは、社会にとって実質的なコストなしに国家の収入を増加させる、という理由で贅沢品は実用品よりも重く課税されるべきである、と提唱した。しかしながら、ヴェブレンにとって女性の代行的閑暇の役割は、召使などのようなその他の社会的集団同様に、衒示的消費によって特徴づけられる略奪社会における主要な社会的費用であった。

最終的な分析においてレーとヴェブレンは衒示的消費が本質的に浪費的であり、経済成長を妨げる、という点で一致している。双方はかくして、究極的には実用品の生産および消費の拡大を指示する社会的、経済的および政策的状況を考慮することに至る。⁽⁶⁸⁾

VI. エジェルとティルマンの結論

エジェルとティルマンの衒示的消費に関するレーとヴェブレン比較検討は、両者の非連続性よりも非常に多くの連続性を暴露した。次に彼らはメイソンの所説を採上げ検討している。彼らによれば、レーとヴェブレンが衒示的消費について相反する説明を展開したというメイソンの主張は修正する必要があるとし、⁽⁶⁹⁾ 二つの点を挙げている。

まず第一にレーにとって衒示的消費が「排他的な個人的な配慮によって動機づけられ、

社会的環境および経済的環境には殆どあるいは全く負っていない」、それに対してヴェブレンにとっては「社会の中でより高い個人的地位および名声を追求する人々にとって不可欠な活動である富の衒示的誇示をする特定の社会経済的状况によって生み出された」というメイソンの考えは、この場合証明されていない。⁽⁷⁰⁾ それゆえに、「虚栄心」と「社会的地位」との間の彼の区別は間違っている。というのも、虚栄心が「他人に対する優越感の単なる欲望を含む」というレーの考えは結局、ヴェブレンの衒示的消費は高い社会的地位を誇示する方法である、という考えとあらゆる点で等しい。換言すれば、レーとヴェブレンは衒示的消費の社会的機能を強調し、それを有用な物品の物的機能と対比した、というのがエジェルとティルマンの考え方である。⁽⁷¹⁾

さらに第二に、仮定および概念の類似に加えて比較分析は衒示的消費の文化的影響の範囲についての彼らの説明があらゆる主要な点において著しく類似している、ということを示している。たとえば、彼らは有用な消費が衒示的消費と対立するが、それにもかかわらず後者のタイプの支出はあらゆる階級にとって必須のものであることで意見が一致している。さらに両者は衒示的消費行動を一つの過程と見做している。そこにおいてはいかなる勝者も存在せず、敗者のみが存在する。要するに、それは浪費的である。しかし、両者ともこの一般化の例外を認めている。つまり、レーは衒示的消費が技術的進歩を促進する、と論じているし、ヴェブレンは衒示的消費が比較的下層の階級が一生懸命働き貯蓄することを促進することを暗示している。⁽⁷²⁾ この点においても両者の考え方には連続性が存在するというのが、エジェルとティルマンの考え

方である。

次に彼らは衒示的消費に関するレーとヴェブレンの両者の相違点についてこう述べている。

「われわれの分析によって明らかになった二つの重要な相違点は(1)レーの本質的に経済的なアプローチに比べてヴェブレンのアプローチは歴史的ならびに社会的含意をより強調している点と(2)その問題に関するレーの特殊な政策規定とヴェブレンの特徴的な寡黙な点である」。⁽⁷³⁾

レーとヴェブレンの間の類似点は衒示的消費についての彼ら個々の著作および彼らの分析を支えている根本的な観念のいくつか—特にレーの「社会的慈善的愛情」やヴェブレンの製作本能や親性本能に限定されない。そしてエジェルとティルマンは次のように結論づけている。「こうしてわれわれはレーとヴェブレンが衒示的消費の概念について非常に共通点のある分析を行なっていたことがわかった。ヴェブレンの説明はより『展開された』ものであり、ある程度まで彼は衒示的消費を進化論的な観点から理論化し、階級関係に加えてジェンダーの役割を適応している。衒示的消費についてのそれぞれの説明における連続性の本質と範囲は明らかに、ヴェブレンがレーの研究を知っていたばかりでなく、それによって影響を受けていたことを示している。かくして、たとえレーが一般的な見解においてヴェブレンに主要な知的影響を与えなかったにしても、いかに少なくとも彼は衒示的消費の概念の特殊なケースにおける重要な先駆者であった。他の人々の研究を引用しないのがヴェブレンの特色であることをよく示しているように、衒示的消費についてのレーの初期の衒示的消費についての特に類似した論考

から彼が得た正確な程度は憶測的なことから
のままであるにちがいない。』⁽⁷⁴⁾

VII. まとめ

以上がエージェルとティルマンの諸説の要約である。彼らはレーとヴェブレンの知的関連の非連続性を主張するメイソンの所説を否定的に吟味し、その知的関連の連続性を主張している。彼らはその根拠として人間性の概念の二重性や文化的影響を挙げている。しかし、全面的に連続性を認めているわけではなく、また、相違点にも言及している。相違点としてはヴェブレンのアプローチの広範囲さと政策に関するレーの明確さである。

確かに両者の比較から衞示的消費に関するレーの先駆性を認めることができる、といえよう。つまり現象面で見れば、レーとヴェブレンの間の衞示的消費に関する類似性は指摘できる。もちろんエージェルとティルマンも述べているように、ヴェブレン自身は明確にレーの影響は認めていないが、レーから影響をうけていることは確かであろう。しかし、エージェルとティルマンの所説に問題点がないわけではない。というもの、ヴェブレンにとって衞示的消費を含む消費は制度として捉えているからであるからである。つまり制度理論と衞示的消費の関係、さらに制度理論の前提となっている本能論への言及のという二つの点で掘り下げ不足の感がある、といえる。

ヴェブレンの人間観の基礎となっている本能と制度および消費との関係は次のように要約することができる。⁽⁷⁵⁾ 彼は原動力として本能の人間行動の一般的な領域を決定する、と考へ、本能を利己的本能と非利己的本能という二つのカテゴリーに分類した。

ヴェブレンにとって資本主義システムは人

間の本質の中に根強く存在するこの心理学的対立に単に文化的な表現を与えているに過ぎない。しかし、諸本能とそれらが導く目的の間には単純な直接的な関連は存在しない。その代わりに習慣という要素が本能と個人を駆り立てる目的あるいは目標の間に存在する、と考えた。この習慣の複合体が制度であり、制度の複合体が文化を形成する。つまりヴェブレンにとって、人間の行動は社会的文化的産物であり、人間行動の大部分が習慣的で制度的である。さらに彼は地位と階級組織の概念を導入した。個人的な観点から地位は同僚たちの尊敬を享受することである。つまり、「ある人の評判」あるいは「名声のために努力する」ということである。人間は社会的あるいは集団的地位の持つ効果を斟酌し、常に努力し、働き、考へ、そして行動する。その絶えざる関心は、その他の人々が彼をどう思っているかであり、彼の個人的な地位を高めるためには、彼に関する人々の意見をいかに改善できるかにある。こうして自己意識は、その地位についての他人の関心の自覚という形態を採る。

ヴェブレンによれば、同じ地位の人々は同じ一般階級や人々の集団に属し、生活に関する共通の考え方や思考様式や行動様式によって相互に結びついている。ヴェブレンの「有階級」は日常の活動における労働および閑暇の役割に対して類似した態度を持っている人々の集団である。彼らは有用なあるいは「生産的」である活動をさける行動パターンを追求する。彼らはその共同体にとっての非有用性であることで相互に打ち勝とうとする。

このように有階級の消費をヴェブレンは制度としてとらえている。つまり『有階級

の理論』におけるヴェブレンの消費について（衞示的消費）も制度理論から首尾一貫説明されている。しかもヴェブレンにおいて制度論は独自の本能論から導き出されている点がレーとは異なる点がエジェルとティルマン全くふれられていない。

しかし、「衞示的消費」に関するヴェブレンとレーの両者の連続性と非連続性の問題を包括的に論じたという点では、エジェルとティルマンの功績は大きい、といえよう。

注

- (1) ヴェブレンと制度学派との関係については、たとえば、最近のものでは田中敏弘著『アメリカ経済学史研究－新古典派と制度学派を中心に－』晃洋書房、1993年11月刊。『アメリカの経済思想』名古屋大学出版会、2002年2月刊。および久保芳和著『アメリカ経済学の歴史』啓文社、1988年9月刊などを参照されたい。
- (2) *The Theory of The Leisure Class : An Economic Study of Institutions* (New York : The Macmillan Company, 1899). ただし、本稿での引用はケリー版を使っている。*The Theory of The Leisure Class : An Economic Study of Institutions* (Reprint of Economic Classics, Augustus M. Kelly, Bookseller : New York ,1975). 『有閑階級の理論』の副題は「諸制度の進化に関する経済的研究」であったが、1912年に「諸制度の経済的研究」に変更された。
- (3) 例えば、ヴェブレンは『有閑階級の理論』の中で、次のように定義している。「制度とは、実は、個人と社会の特定の関係なり、特定の機能なりに関する支配的な思考習慣である。」(小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波文庫、昭和36年5月25日刊、183～184ページ)。
- (4) この点については、たとえば、小原啓士著『ヴェブレンの社会経済思想』一橋大学経済研究叢書18、岩波書店、昭和41年3月刊、松尾博著『ヴェブレン

ンの人と思想』ミネルヴァ書房、昭和41年6月刊、中山大著『ヴェブレンの思想体系』ミネルヴァ書房、1974年5月刊、松本正徳著『ヴェブレン研究－アメリカ経営思想史研究序説－』未来社、1971年2月刊などを参照されたい。特にレーとの関連については、いずれの研究においても全く触れられていない。

- (5) Laurie Simon Bagwell and B.Douglas Bernheim, "Veblen Effects in a Theory of Conspicuous Consumption", *American Economic Review*, June, 1996. p.349.
- (6) Stephen Edgell and Rick Tilman, "John Rae and Thorstein Veblen on Conspicuous Consumption: A Neglected Intellectual Relationship", *History of Political Economy*, 23:4, 1991, pp.731-744.
- (7) K.H. Hennings, "John Rae", *New Palgrave : A Dictionary of Economics*, edited by J. Eatwell. M. Milgate, and Paul Newman, pp.39-40.
- (8) Edgell and Tilman, *op. cit.*, p731.
- (10) ヴェブレンの1909年に発表した「フィッシャーの利子率」という論文の中でレーについて次のように述べている「ジョン・レーのような優れた信頼のおける功利主義の理論家」。「Fisher's Rate of Interest" *The Political Science Quarterly*, Vol. XXXIV, June, 1909, p.297. 同論文は、その後、次の論文集に再録されている。*Essays in Our Changing Order*, edited by Leon Ardzrooni (New York: Augustus M, Kelly, Bookseller, 1964) pp.137-147. 該当箇所はケリー版では138ページ。
- (11) Joseph Dorfman, edited. *Essays, Reviews and Report : previously uncollected writings, and with an introductions New Light on Veblen* (Augustus M. Kelly-Publishers: New York, 1973), p.31.
- (12) この点については Veblen, *The Theory of the Leisure Class*, preface. 小原訳、8ページを参照されたい。
- (13) Edgell and Tilman, *op. cit.*, p.732.
- (14) *Ibid.*, p.732. Harvey Leibenstein, "Bandwagon, Snob, and Veblen Effects in The Theory of Consumers' Demand", *Quarterly Journal of*

- Economics*, 64. 1950. May.p.184.
- (15) Edgell and Tilman, *op. cit.*, p.732.
- (16) Roger Mason, *Conspicuous Consumption: A Study of Exceptional Consumer Behavior*, 1981.
- (17) Edgell and Tilman, *op. cit.*, p.732.
- (18) *Ibid.*, p.732.
- (19) *Ibid.*, p.732.
- (20) *Ibid.*, pp.732-733.
- (21) John Rae, *Statement of some New Principles on The Subject of Political Economy, Exposing The Fallacies of The System of Free Trade* (Hilliard, Gray, and Co :Boston,1834). 本稿では、ケリー版のリプリントを使用している。Reprint of Economic Classics (Augustus M. Kelly, Bookseller : New York.1964).
- (22) *Ibid.*, pp.143-146.
- (23) *Ibid.*, p.265.
- (24) *Ibid.*, p.267.
- (25) Edgell and Tilman, *op. cit.*, p.734.
- (26) John Rae, *op. cit.*, pp.274-275, p.286.
- (27) *Ibid.*, p.274 and p.282.
- (28) *Ibid.*, pp.274-295.
- (29) *Ibid.*, pp.272, and p.286.
- (30) *Ibid.*, p.286.
- (31) *Ibid.*, p.291.
- (32) *Ibid.*, p.280.
- (33) *Ibid.*, p.281.
- (34) *Ibid.*, p.271.
- (35) *Ibid.*, p.275.
- (36) *Ibid.*, p.275.
- (37) *Ibid.*, p.281.
- (38) *Ibid.*, p.265.
- (39) Edgell and Tilman, *op. cit.*, p.736.
- (40) *Ibid.*, p.736.
- (41) John Rae, *op. cit.*, p.290.
- (42) Edgell and Tilman, *op. cit.*, p.736.
- (43) *Ibid.*, p.737.
- (44) *Ibid.*, p.737.およびJohn Rae, *op. cit.*, pp.310-311.
- (45) Edgell and Tilman, *op. cit.*, p.737.
- (46) The Economic Theory of Woman's Dress". *Popular Science Monthly*, Vol. XLVI, November, 1894. 現在同論文は、次の論文集に再録されている。*Essays in Our Changing Order*, pp.65-77.
- (47) *Ibid.*, pp.74-76.
- (48) *Ibid.*, pp.68-69.
- (49) Edgell and Tilman, *op. cit.*, p.738.
- (50) Veblen, *The Theory of The Leisure Class*, pp.100-101. 小原訳、99-100ページ。
- (51) *Ibid.*, p.98. 同上訳書、97ページ。
- (51) *Ibid.*, p.99. 同上訳書、98ページ。
- (52) *Ibid.*, p.99. 同上訳書、98ページ。
- (53) *Ibid.*, p.93. 同上訳書、92ページ。
- (54) *Ibid.*, p.74. 同上訳書、75ページ。
- (55) Edgell and Tilman, *op. cit.*, p.739.
- (56) *Ibid.*, p.739.
- (57) Veblen, *The Theory of The Leisure Class*, p.87. 小原訳、87-88ページ。
- (58) *Ibid.*, p.86. 小原訳、87ページ。
- (59) *Ibid.*, p.88. 小原訳、88ページ。
- (60) *Ibid.*, p.85. 小原訳、85ページ。
- (61) *Ibid.*, p.85. 小原訳、85ページ。
- (62) *Ibid.*, p.62. 小原訳、65ページ。
- (63) Edgell and Tilman, *op. cit.*, p.740.
- (64) *Ibid.*, p.740.
- (65) *Ibid.*, p.740.
- (66) Rae, *op. cit.*, p.95.
- (67) Veblen, "The Instinct of Workmanship and The Irsomeness of Labor" *The American Journal of Sociology*, Vol.IV, September,1898. Reprinted in *Essays in Our Changing Order*, p85.
- (68) Edgell and Tilman, *op. cit.*, p.741-742.
- (69) *Ibid.*, p.742.
- (70) Mason, *op. cit.*, pp4-5, p.17. (ただし引用は Edgell and Tilman "John Rae and Thorstein Veblen on Conspicuous Consumption: A Neglected Intellectual Relationship" p.742.による)。
- (71) Edgell and Tilman, *op. cit.*, p.742.
- (72) *Ibid.*, p.742.
- (73) *Ibid.*, p.743.
- (74) Edgell and Tilman, *op. cit.*, p.743.
- (75) Allan G.Gruchy, *Modern Economic Thought : The American Contribution* (New York : Augustus

埼玉学園大学紀要（経営学部篇） 第7号

M.Kelly Publishers, 1967) pp.58-80.